

「いのちをいただく」

第15組 覺證寺 後藤 寛

先日、車を運転していると、道路の真ん中で二匹の小鳥がじゃれあっていました。私の車が近づけば飛び立つであろうと思っていたらそのまま車の下に入っしまいコツンと音がしました。後ろを振り返ると小鳥が二匹とも倒れていました。

「ああ、小鳥のいのちを奪ってしまった。」

と罪悪感を覚えました。そして、数時間後にまたその場所を通ると、死んだ小鳥の姿がなく、死んでいなかったのだと、ホッとしました。

私たちは、目の前で生き物が死んだ時は悲しんだり、喪失感を覚えたりします。しかし我々は、日々の暮らしの中でいろいろな生き物の死を通して生活しているかと思います。それは何かといいますと、私たちは毎日、口から食べ物を取り込んでいのちを保っています。その食べ物は何かといえば、ほかならぬ私とは別の「いのち」です。私たちは他の「いのち」をいただいて、私の「いのち」としているのです。

以前、何かの冊子で次のようなことが書いてありました。真宗大谷派では、食前と食後に次のような言葉を言います。

食前 「み光のもと、われ今さいわいに、この^{きよ}淨き食をうく、いただきます。」

食後 「われ今、この^{きよ}淨き食を終わりと、心ゆたかに力身にみつ、ごちそうさま。」

仏様の教えのもとでは平等のいのちを生きていると教えられる私たちではありますが、食べなければ生きていくことはできません。しかし、いま幸いにも、この私の身となり、いのちになってくださる、尊い食事をいただくことができます。しかし、それは他の「いのち」をいただくことでもあります。そのことに思いをめぐらせ、心してこの食事をいただきますという意味でしょう。とありました。

私達が生きていくうえで大切な食事は、生き物の死を通して「いのち」をいただくことでもありますから、食事をされる時には「いただく」という気持ちを大切にさせていただきたいと思いますし、私も忘れないように心がけたいと思います。